

(資料)

認知症の人にやさしいまちづくりに向けた シビックプライドに関する文献検討

Civic Pride for Dementia-Friendly Community Development Literature Review on

岡村絹代¹⁾ 清水八恵子¹⁾ 松山 旭²⁾ 五十嵐慎治¹⁾ 名和祥子¹⁾ 高木弘樹¹⁾

I. はじめに

地球規模の高齢化の進展の中で、WHO（世界保健機関）は高齢者にやさしい地域づくり（Age-Friendly City）を掲げ、「高齢者にやさしいまち」の8要素（図1）を提唱し推進している（WHO, 2007）。その拡張として、8要素を基盤とした認知症の人の視点に立った設計がされた社会（認知症フレンドリー社会）（徳田, 2018）の実現に向けた取り組みが推進されている。わが国でも認知症施策推進5か年計画（オレンジプラン）（厚生労働省, 2012）を経て、認知症施策推進総合戦略（新オレンジプラン）を基盤とした「認知症施策推進大綱」（厚生労働省, 2019）により、『共生』と『予防』を重視した施策を推進している。「認知症施策推進大綱」では、『共生』とは、認知症の人が尊厳と希望をもって認知症とともに生きる、また、認知症の有無にかかわらず同じ社会で共に生きるという意味があり、『予防』とは認知症になることや認知症の進行を緩やかにするという意味で使われている。したがって、認知症の人や家族の視点を重視しながら、認知症になっても希望をもって社会の中で日常生活をおくることができる地域づくりを目指す必要がある。そのため、わが国でも「高齢者にやさしいまち」の8要素に加え、認知症の人にやさしいまちの要素として「認知症の理解」「共生」「受援力」を追加した「認知症の人・高齢者等にやさしい地域づくりの手引き」が作成され（尾島, 2020）、その活用が推奨されている。

市民参加	尊厳/ 社会的包摂	公共スペース /建物	住宅
交通機関	医療・保健・ 福祉サービス	社会参加	コミュニケー ション/情報

図1 高齢者にやさしいまちの8要素（WHO, 2007）

一方、認知症の人はサポートを受けることへの遠慮やためらいがあること、人と関わると嫌な思いをすることなど、居住地域での暮らしづらさを感じ、外出や交流機会の減少が課題となっている（山下ら, 2022）。若年者では認知症を他人事として捉えており（岡村ら, 2015）、認知症の理解は十分とはいえ、人とのつながりの希薄化や地域への帰属意識の低下など、地域社会が脆弱している中で、『共生』を強化する方法は確立していない。『共生』を強化した認知症の人にやさしいまちを目指すには、住民の共通意識が必要である。

そこで、筆者らは近年まちづくりで注目されているシビックプライドが『共生』の強化に関連するのではないかと推察した。「市民（として）の誇り」を意味するシビックプライドという言葉は、近年、多くの自治体やまちづくりの現場で使われている（伊藤, 2017）。「この都市をより良い場所にするために自分自身がかかわっている」というある種の当事者意識を伴う自負心であり、都市と自分が深く関係しているという気持ちがあつてこそ、シビックプライドが認識される。また、シビックプライドは、抽象的な感情ではなく、その都市やコミュニティのもつ何らかのもの・こと・場所などを拠り所にする人が多い（伊藤, 2015）。伊藤（2015）は、現在生活している都市が生まれ故郷でなくても、立場や地縁血縁に関わらず、都市の一員として未来をと

1) 朝日大学保健医療学部看護学科

2) 日本福祉大学看護学部看護学科

もにつくっていくのが市民であり、シビックプライドが醸成されると結果としてコミュニティにも良い影響をもたらすと述べている。したがって、シビックプライドが醸成されると、そのまちに愛着をもち、まちを良くしようと考えるため、地域活動や住民同士のコミュニケーションが促進し『共生』が強化され、認知症についても自分事として考え行動できるのではないかと推察した。そのため、認知症の人にやさしいまちづくりを推進していくために、シビックプライドは『共生』を強化する要素となり得るかを系統的に整理することが重要である。シビックプライドが地域住民の『共生』を強化し、認知症の人にやさしいまちの指標の一つとなることが明らかになれば、今後の認知症の人にやさしいまちづくりの推進に寄与できると考える。

II. 目的

現段階におけるシビックプライドに関する研究の概要を整理するとともに、その定義を確認し、シビックプライドが「認知症の人にやさしいまち」における『共生』を強化する指標としての活用可能性を考察することを目的とする。

III. 研究方法

1. 文献の検索方法

シビックプライドに関する国内の先行研究を概観するために、医学中央雑誌 Web 版（以下、医中誌）と NII 学術情報ナビゲータ（以下、CiNii）を用いて検索した。先行研究の動向を包括的に概観するため、検索キーワードは「シビックプライド」とした。検索対象期間や検索文献は、2023 年 9 月 20 日までに公表されているすべての文献とした。

2. 文献の選択

文献選択過程のフローチャートを図 2 に示した。データベースで抽出された文献は、医中誌が 5 件、CiNii が 155 件であった。そのうち重複している文献は 1 件であった。

CiNii で抽出された 155 文献の内訳は、論文が 131 件、図書が 14 件、博士論文が 1 件、プロジェクトが 9 件であった。医中誌で抽出された 5 文献の内訳は、原著論文が 1 件、会議録が 4 件であった。その中から、タイトルやキーワードにシビックプライドを用いている論文を熟読し、シビックプライドに関連する内容や定義を記述している 13 文献を分析対象とした。

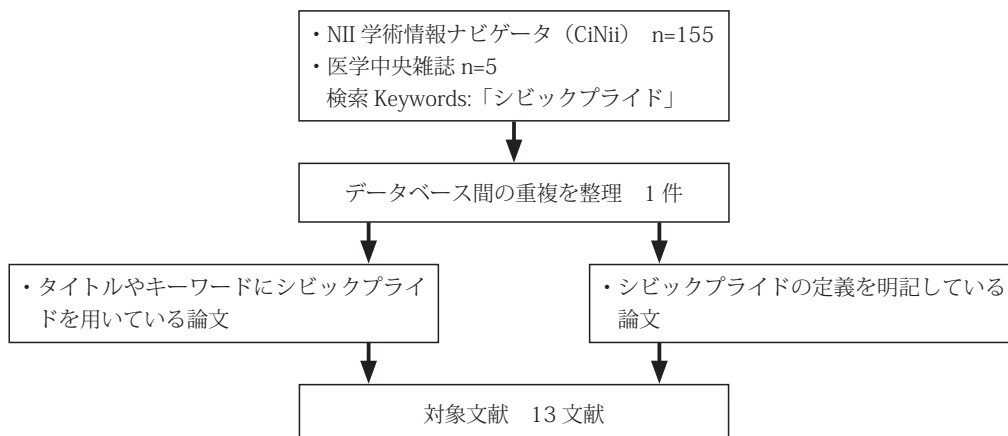


図2 シビックプライドに関する文献選択のフローチャート

3. 分析方法

対象文献は、文献の著者（発行年）、対象、調査方法、シビックプライドの定義、目的、結果を整理し概観した。次に、類似性に基づいてシビックプライドの定義を抽出して整理し、そこから、シビックプライドを表す核となるキーワードを抽出した。それらの結果を用いて、シビックプライドが「認知症の人にやさしいまち」における『共生』を強化する指標としての活用可能性を考察した。

4. 倫理的配慮

本研究に用いた文献は、著者、タイトル、年、掲載誌の出典を明確に記載することで著作権を保護した。目的に沿った内容を使用・分析し、著者の意図と異なることがないように記述した。また、共同研究者とともに内容について検討を行い、分析内容の妥当性を確保するとともに倫理上の配慮を行った。

IV. 結果

1. 文献の概要

1) 年次内訳

対象文献の年次内訳は、2015年～2017年に各1件ずつ、2019年に3件、2020年に1件、2021年に2件、2022年に4件であった。

2) 調査対象

調査対象は、地域住民を対象とした文献が3件（羽島ら、2015；伊藤、2019；藪谷ら、2022）、建築関係の専門職者を対象とした文献が1件（伊藤、2017）、小学生を対象として文献が3件（田中ら、2016；井形ら、2019；田中、2021）、中学生を対象とした文献が1件（谷川ら、2022）、高校生を対象とした文献が2件（田中、2020；森ら、2022）、自治体職員を対象とした文献が1件（田中ら、2020）、文献研究が3件（牧瀬、2019；渡部、2021；宗、2022）であった。

3) 調査内容および結果

調査方法は、実践的研究が5件（羽島ら、2015；田中ら、2016；井形ら、2019；田中、2020；田中、2021）であった。羽島ら（2015）は、住民参加型の学習は町に対する誇りや愛着意識を向上させる傾向を見出した。田中ら（2016、2021）と井形ら（2019）は、小学校での総合学習や地域学習で、他者とかかわることはシビックプライドの涵養効果があること、地域に対する誇りや愛着、自負が醸成されることを報告していた。田中（2020）も、高校生を対象とした調査により、同様の成果を得たことを報告していた。

文研研究は3件（牧瀬、2019；渡部、2021；宋、2022）であった。牧瀬（2019）がシビックプライドの動向について整理した結果、シビックプライドの定義を「都市に対する市民の誇り」とした上で、市民のシビックプライドが高まれば定住が促進すること、居留意向調査や住民推奨度調査によりシビックプライドの有無が測定可能であることを報告していた。渡部（2021）は、シビックプライドに類する感情があることは、地域づくり活動を推進することを報告していた。宋（2022）は、地域の人口増加のためには、シビックプライドよりも居住満足度の方が関係深いことを報告していた。

アンケート法を用いた量的研究は3件（伊藤、2019；森ら、2022；藪谷ら、2022）であった。伊藤（2019）は、地域住民600名を対象としたアンケート調査と海外の動向を比較し、我が国のシビックプライドの源泉には「都市環境」「食・自然」「文化・産業」「交通」が成因であるが、「文化・産業」に対する「都市環境」の特性は明確ではないことを報告していた。森ら（2022）は、高校生のシビックプライドの醸成要因として地域への「愛着」の醸成が重要であり、「愛着」があることが「地域環境」や「文化」の源泉に影響していることを報告していた。また、藪谷ら（2022）は、地域の政策満足度の向上させることで地域への愛着が形成されること、男性や高齢者及び居住年数が長い人はシビックプライドが高いことを報告していた。

インタビュー法を用いた質的研究は2件（伊藤、2017；谷川ら、2022）であった。伊藤（2017）は12名の都市建設担当者に対するインタビュー調査により、「地域参画」「地域アイデンティティ」「忠誠的愛郷心」「地

表1 文献の概要

NO	著者 (出版年)	対象	調査方法	シビックプライドの定義	目的	結果
1	羽鳥ら (2015)	地域住民 50 名 (男性 32 名, 女性 18 名, 平均年齢 59.3 ± 15.0 歳)	実践的研究	「市民が都市に対して誇りや愛着」	シビックプライドを育成するコミュニケーション施策としての, 住民参加型・回覧型「思い出マップ」づくりの効果の検討.	地域住民における「棹の森」や町に対する誇りや愛着意識が向上する傾向が見られた.
2	田中ら (2016)	小学 4 年生	実践的研究	「市民が地域社会に対してもつ自負と愛着, またその向上に対して積極的に参加する姿勢」	小学校社会科および総合的な学習時間での「まち歩き」「まち歩きマップ」「交流会」がシビックプライドの涵養に果たした役割の検討.	「まち歩き」により, 児童が地域社会との結びつきを理解していく過程がシビックプライドの涵養に効果的であり, 「知る」「伝える」「話し合う」サイクルがシビックプライドを涵養する.
3	伊藤 (2017)	対象地域の都市建設部の担当者及び地元建築士 12 例	質的研究 (インタビュー調査)	「市民(として)の誇り」	シビックプライドの多面性と日本の都市・市民のシビックプライドの構成とシビックプライドの概念の一端を客観的に明らかにする.	シビックプライド尺度として「地域参画」「地域アイデンティティ」「忠誠的愛郷心」「地域愛着」の側面があると整理し, シビックプライド尺度として提案した.
4	井形ら (2019)	小学生 65 名	実践的研究	「市民が都市に対してもつ自負と愛着」	地域学習によって児童に起きる地域に対する意識の変化の構造とその工程を明らかにする.	地域学習を通じた他者とのかかわりが地域に対する意識の変化を生む.
5	牧瀬 (2019)	文献	文献研究	「都市に対する市民の誇り」	シビックプライドの動向を明らかにする.	シビックプライドの定義は「都市に対する市民の誇り」であり, 市民のシビックプライドが高まれば定住が促進する. 居住意向調査や住民推奨度調査によりシビックプライドの有無が測定可能. 類似概念にはコミュニティ論や市民参加論・協働論, ソーシャルキャピタル論があり, シビックプライドは決して新しい概念ではない. マジックワード化しつつあるため注意が必要.
6	伊藤 (2019)	地域在住の 600 名 (男性 365 名, 女性 235 名, 最年少 15 歳, 最年長 86 歳)	量的研究 (アンケート調査)	「都市に対する市民としての誇り」	国内外の都市でのシビックプライドの源泉の傾向を捉え, 都市環境, 都市環境以外のシビックプライドの源泉の特徴と何がシビックプライドを高めるのかを探る.	海外では, 都市環境, 文化, スポーツがシビックプライドの源泉ととらえられている. 海外と我が国のシビックプライドの源泉は対照的であり, 我が国では「都市環境」「食・自然」「文化・産業」「交通」が成因であるが, 「文化・産業」に対する「都市環境」の特性は明確ではない.
7	田中 (2020)	高校生と自治体職員	実践的研究 (インタビュー調査)	「市民が地域や都市に対して持つ, 愛着や誇り, 自負」	多様な主体の協働による持続可能な地域づくり実践知を抽出すること.	多様な主体が対話を重視した学び合いを実践することで, 地域に対する愛着や誇り, 自負が醸成される.
8	田中 (2021)	小学生	実践的研究	「都市に対する市民の誇り」	地域に住む子どもたちのシビックプライドの涵養.	ふるさとの風景を構成している自然, 社会環境の成り立ちを知ることは, 地域に対する愛着や誇り, 自負が醸成される.
9	渡部 (2021)	文献	文献研究	「対象となる地域にかかわる市民としての自覚と責任感に支えられた, 地域に対する誇り」	市民の感情としてのシビックプライドが地域づくりに対してもつ可能性と問題点を明らかにする.	地域づくりの活動に参加した人においてシビックプライドに類する感情がその後の活動を推進した.
10	谷川ら (2022)	中学生	質的研究 (インタビュー調査)	「地域に対する愛着と誇り」「ある種の当事者意識に基づく自負心」	中学生を対象としたシビックプライド尺度項目の構成要素を抽出・検討する.	シビックプライドの構成要素は, 「地域愛着」「地域とのつながり」「地域の誇り」「地域参画」「伝統を受け継ぐ」「健康への関心」の項目があった.
11	宗 (2022)	文献	文献研究	「都市に対する市民としての誇り」	住民の地域への満足度およびシビックプライドが自治体の人口増減とどのような関係を持っているのかを明らかにする.	住民満足度には 8 つの因子があり, 人口増加率と「イメージ」「親しみやすさ」「生活利便性」「物価家賃」は正の関係が, 「静か治安」「自然観光」は負の関係があった. 「行政サービス」「交通利便性」は有意な関係はなかった. 人口増加に対しては, シビックプライドよりも「居住満足度」との関係が深かった.
12	森ら (2022)	対象地域の高校 1 ~ 2 年生 497 名	量的研究 (アンケート調査)	「都市に対する市民の誇り」	高校生が地域の誇りに思う源泉がシビックプライドにどのように影響しているかを分析し, シビックプライドの醸成要因を明らかにする.	高校生の将来の定住意識の形成には地域への「愛着」の醸成が重要であり, 「愛着」が「地域環境」と「文化・産業」の源泉に影響していた.
13	藪谷ら (2022)	18 歳以上の地域住民 437 名	量的研究 (アンケート調査)	「都市に対する市民としての誇り」	地方自治体の総合計画に記されている各政策への市民満足度がシビックプライドに与える影響を実証的に検証し, どのような政策がシビックプライドの醸成に有効かを明らかにする.	政策満足度を向上させることでシビックプライドを醸成させる地域愛着が形成され, その結果としてアイデンティティと参画, 持続願望が醸成される. 男性, 居住年数の長い市民, 高齢者はシビックプライドが高い.

* No. 1 ~ 4, 12 のシビックプライドの定義は, 伊藤香織, 紫牟田伸子 (監修) シビックプライド研究会 (編集), シビックプライド—都市のコミュニケーションをデザインする, 株式会社宣伝会議 初版第 1 冊 東京 2009. より引用されたもの.

域愛着」の側面をシビックプライド尺度として提案していた。谷川ら(2022)は、中学生6名へのインタビュー調査により、シビックプライドの構成要素を、「地域愛着」「地域とのつながり」「地域の誇り」「地域参画」「伝統を受け継ぐ」「健康への関心」の項目を抽出していた。

2. シビックプライドの定義と核となるキーワード

シビックプライドの定義として、羽嶋ら(2015)、田中ら(2016)、伊藤(2017)、井形ら(2019)、森ら(2022)の5文献は、シビックプライドの考え方を提唱・普及させた伊藤ら(2008)の「都市に対する市民の誇り」を引用していた。その他の文献は、出典や引用は明記されていないが、同様に伊藤ら(2008)が提唱しているシビックプライドの説明と類似していた。また、本研究ではシビックプライドとして文献中に定義として記述しているものの、明確な定義を確認することはできなかった。

文献から抽出したシビックプライドの定義を概観し、それらから核となるキーワードを抽出、整理した結果、複数抽出されていたキーワードは、「誇り(11個)」、「都市(9個)」、「市民(5個)」、「愛着(5個)」、「地域(4個)」、「自負(3個)」であった。また、「地域社会」、「当事者意識」、「積極参加姿勢」、「自覚」、「責任感」は、各1個ずつ抽出した(表2)。

表2 シビックプライドの定義と核となるキーワード

NO	著者(発行年)	シビックプライドの定義	核となるキーワード(数)
1	羽嶋ら(2015)	「市民が都市に対して抱く誇りや愛着」	誇り(11)
4	井形ら(2019)	「市民が都市に対してもつ自負と愛着」	都市(9)
7	田中ら(2020)	「市民が地域や都市に対して持つ、愛着や誇り、自負」	市民(5)
10	谷川ら(2020)	「地域に対する愛着と誇り」「ある種の当事者意識に基づく自負心」	愛着(5)
2	田中ら(2016)	「市民が地域社会に対してもつ自負と愛着、またその向上に対して積極的に参加する姿勢」	地域(4)
9	渡部(2021)	「対象となる地域にかかわる市民としての自覚と責任感に支えられた、地域に対する誇り」	自負(3)
3	伊藤(2017)	「市民(として)の誇り」	地域社会(1)
5	牧瀬(2019)	「都市に対する市民の誇り」	当事者意識(1)
6	伊藤(2019)	「都市に対する市民としての誇り」	積極的参加姿勢(1)
8	田中(2021)	「都市に対する市民の誇り」	自覚(1)
11	宗(2022)	「都市に対する市民としての誇り」	責任感(1)
12	森ら(2022)	「都市に対する市民の誇り」	
13	藪谷ら(2022)	「都市に対する市民としての誇り」	

* No.1~4, 12のシビックプライドの定義は、伊藤香織、紫牟田伸子(監修)シビックプライド研究会(編集)、シビックプライド—都市のコミュニケーションをデザインする、株式会社社宣伝会議 初版第1冊 東京 2009. より引用されたもの。

V. 考察

1. シビックプライドに関する研究の概要

シビックプライドをキーワードとし、その定義を明記している文献は13件と少なく、研究としては発展途上の段階であるといえる。また、そのほとんどは特定の地域のまちづくりに応用した研究であり、実践的研究や実態調査にとどまり、一般化には至っていない。

しかし、他者とのかわりを通じた学び合いはシビックプライドを高めること(羽嶋ら, 2015; 田中ら, 2016; 井形ら, 2019; 田中ら, 2020; 田中, 2021), 地域への「愛着」があることが「地域環境」や「文化」の源泉に影響し(森ら, 2022), 地域の政策満足度の向上が地域への愛着を形成すること(藪谷ら, 2022), シビックプライドは地域への定住促進の指標になることなど(牧瀬, 2019)から、シビックプライドはまちづくりの指標としての活用可能性が高いと推察できた。さらに、居住年数が長い人はシビックプライドが高い(藪谷ら, 2022)という報告から、長く居住することでそれに応じた地域の良さに触れる機会も増加し、その結果「愛着」が形成され、シビックプライドを高めることにつながるといえる。伊藤(2017)

によるシビックプライド尺度の提案や、谷川ら(2022)によるシビックプライドの構成要素の抽出も行われていたが、各調査の対象者は異なっており一般化には至っておらず、シビックプライドの定義や理論化を含め、さらなる結果の蓄積が求められる。

2. 『共生』を強化する指標としてのシビックプライドの検討

シビックプライドの考え方を提唱・普及させた一人である伊藤(2008, 2015)は、「市民が都市に対して持つ誇りや愛着をシビックプライドというが、日本語での郷土愛とは少々ニュアンスが異なり、自分はこの都市を構成する一員でここをより良い場所にするためにかかわっているという意識を伴う」と述べている。つまり、「ある種の当事者意識に基づく自負心と言える」と定義している。岐阜市の事例では、「住む人」「来る人」「働く人」を増やす成長都市の実現に向け、市のもつ魅力やポテンシャルを生かしながら、市の認知度やイメージアップを図る取り組みを推進しており、この調査でもシビックプライドを都市に対する愛着や誇り、単なる郷土愛を超えた当事者性を要件としている(松下, 2021)。このように、わが国では伊藤(2008, 2015)が提唱しているシビックプライドの定義を参考に、まちづくりに応用されている現状がある。対象文献においても、伊藤(2008, 2015)の提唱している定義が多用されていることから、シビックプライドの定義について、十分に議論されていないまま使用されていると推察した。したがって、筆者らが整理したシビックプライドの核となるキーワードにも、伊藤(2008, 2015)の定義と共通性があることは当然であり、現時点では、伊藤(2008, 2015)の提唱したシビックプライドの定義が広く活用されていることが現状であるといえる。また、キーワードの「誇り(11個)」、「愛着(5個)」、「自負(3個)」は、個人の心の中の思いや感情およびそれを意味する行動であり、「都市(9個)」、「市民(5個)」、「地域(4個)」は、個人が所属する特定の場所を示すものである。河野(2011)は、感情には少なからず規範が影響していると述べており、可視化できるものではないが、人々が抱く自分たちの場所や帰属感は、その規範性を高め、強いきずなにつながると推察する。それらは、「当事者意識」、「積極参加姿勢」、「自覚」、「責任感」をキーワードに、まちとまちへの思いとともに、まちにかかわるといふ主体的な行動へとつながるといえる。

厚生労働省(2020)は、地域共生社会の実現に向けて、「制度・分野ごとの『縦割り』や「支え手」「受け手」という関係を超えて、地域住民や地域の多様な主体が参画し、人と人、人と資源が世代や分野を超えてつながることで、住民一人ひとりの暮らしと生きがい、地域をともに創っていく社会を推進している。認知症の人にやさしいまちを目指すには、『共生』を強化した住民の共通意識が必要であるため、シビックプライドの核となる「誇り」、「愛着」、「自負」のキーワードを、特定の「都市」、「地域」で「市民」として高めていくことは、「認知症の人にやさしいまち」における『共生』の強化につながり、さらにまちを良くしようという当事者性があることが、地域をともに創っていく社会の推進に役立つといえる。したがって、本研究ではシビックプライドの明確な定義は認められなかったが、「認知症の人にやさしいまち」における『共生』を強化する指標として活用可能性が高いと推察できた。今後は、シビックプライドの定義の精錬を行い、シビックプライドが認知症の人にやさしいまちにおける『共生』を強化する指標となり得るかを明らかにしていく基礎的研究に着手していきたい。

VI. 結論 (Conclusion)

1. シビックプライドに関する研究数は少なく、一般化には至っていない。
2. シビックプライドの明確な定義は認められなかったが、伊藤(2008, 2015)が提唱している定義が広く用いられていた。各文献が用いている定義からは、「誇り」、「愛着」、「自負」、「都市」、「地域」、「市民」「地域社会」、「当事者意識」、「積極参加姿勢」、「自覚」、「責任感」のキーワードが抽出された。
3. シビックプライドは、「認知症の人にやさしいまち」における『共生』を強化する指標として活用可能性が高いが、シビックプライドの定義の精錬を行う必要性が示唆された。

本研究に関して、開示すべき利益相反は存在しない。

本研究は、JSPS 科研費基盤研究 C 23K10387 の助成を受けて実施したものである。

文 献

- 羽鳥剛史, 片岡由香, 牧野太亮 (2015). 住民参加型・回覧型「思い出マップ」によるシビックプライド醸成策に関する研究 - 四国中央市妻鳥町「棹の森」を対象とした取り組み事例 - 公益財団法人日本都市計画学会都市計画論文集, 50 (3), 445-450.
- 井形廉太郎, 田中尚人 (2019). 地域学習における児童のシビックプライド形成に関する研究. 土木学会論文集 D3, 75 (5), 181-189. 株式会社宣伝会議, 東京.
- 伊藤香織, 紫牟田伸子 (2008). シビックプライド - 都市のコミュニケーションをデザインする - (初版第 1 冊). 164-171, 株式会社宣伝会議, 東京.
- 伊藤香織 (2015). シビックプライド 2 【国内編】 (初版), 126-131, 東京.
- 伊藤香織 (2017). 都市環境はいかにシビックプライドを高めるか - 今治市を事例とした実証分析 - . 公益財団法人日本都市計画学会 都市計画論文集, 52 (3), 1268-1275.
- 伊藤香織 (2018). シビックプライドとコミュニケーションポイント 彩の国さいたま人づくり広域連合 Think-ing, 2-8.
- 伊藤香織 (2019). シビックプライドの源泉としての都市環境及び諸要素 - 富山市中心市街地と富山地域を事例として - . 公益財団法人日本都市計画学会都市計画論文集, 54 (3), 615-622.
- 厚生労働省 (2019 年 6 月 18 日). 認知症施策推進大綱について. 厚生労働省ホームページ.
https://www.mhlw.go.jp/stf/seisakunitsuite/bunya/0000076236_00002.html
(2023 年 10 月 31 日)
- 厚生労働省 (2012 年 9 月 5 日). 「認知症施策推進 5 か年計画 (オレンジプラン)」について. 厚生労働省ホームページ. (2023 年 12 月 12 日)
<https://www.mhlw.go.jp/stf/houdou/2r9852000002j8dh.html>
- 厚生労働省 (2023 年 10 月 20 日). 「地域共生社会」の実現に向けて. 厚生労働省ホームページ「地域共生社会のポータルサイト」. <https://www.mhlw.go.jp/kyouseisyakaiportal/>
- 河野哲也 (2011). 意識は存在しない: 心・近く・自由. 講談社 東京.
- 牧瀬 稔 (2019). 日本における「シビックプライド」の動向整理. 法政大学公共政策, 7, 13-26.
- 岡村絹代, 嶋田さおり, 土幡 淳, 小島美和 (2015). 愛媛県愛南町における認知症になっても暮らしやすい町づくりの推進 - 地域住民の認知症に関する意識調査の結果から - , 愛媛県立医療技術大学紀要, 12 (1), 37-45.
- 尾島俊之 (2020). 高齢者にやさしいまちづくり指標と評価方法について, 厚生労働行政推進調査事業費補助金 厚生労働科学特別研究事業 令和元年度総括研究報告書. 41-49.
https://mhlw-grants.niph.go.jp/system/files/download_pdf/2019/201906021A.pdf
(2023-9-1)
- 宗 健 (2022). 地域の居住満足度およびシビックプライドと人口増減の関係. 日本建築学会計画系論文集, 87 (799), 1731-1740.
- 田中尚人, 堀尾和美 (2016). 小学校地域学習におけるシビックプライド涵養に関する実践的研究. 実践政策学, 2 (1), 107-113.
- 田中尚人, 中田晴彦, 森 啓介 (2020). 長島町における異文野融合によるシビックプライド醸成に資する実践研究. 熊本大学政策研究, 10, 17-27.
- 田中尚人 (2021). 上天草市におけるシビックプライドを基盤とした地域課題解決の実践. 熊本大学政策研究, 5-14.

- 谷川涼子, 古川照美, 日影静香, 他 (2022). 中学生を対象としたシビックプライド尺度開発のための予備的検討 —健康に焦点を当てて—. 日本ニューマンケア科学学会誌, 15 (2), 8-14.
- 徳田雄人 (2018). 認知症フレンドリー社会, 岩波書店, 東京.
- 松下敬一 (2021). 市民がつくる, わがまちの誇り —シビックプライド政策の理論と実際— (初版第1刷). 16-17, 株式会社水曜社, 東京.
- 森 豪太, 藪谷祐介, 宋 俊 (2022). 高校生のシビックプライドの醸成要因と将来の定住意識に与える影響. 公益財団法人日本都市計画学会都市計画論文集, 57 (3), 933-940.
- World Health Organization (2007). The WHO Age-friendly Cities Framework.
<https://extranet.who.int/agefriendlyworld/age-friendly-cities-framework/> (2023-10-31)
- 渡部 薫 (2021). 地域づくりの方法としてのシビックプライド —その可能性と政策的関与のあり方についての検討—. 熊本大学法学会 Kumamoto law review, 152, 142-105.
- 藪谷祐介, 阿久井康平 (2022). 地方自治体の都市政策としての市民満足度がシビックプライドに与える影響 —富山県小矢部市を事例として—. 公益財団法人日本都市計画学会都市計画論文集, 57 (3), 1156-1163.
- 山下真理, 岡村 毅, 宇良千秋, 他 (2022). 認知機能低下を抱えた地域在住高齢者のインフォーマル・サポートと精神的健康に関する質的研究. 日本認知症ケア学会誌, 20 (4), 60-571.